真夏の昼の陽炎の如く

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真夏の昼の陽炎の如く

【Ｎコード】
Ｎ６５８１Ｅ

【作者名】
みゆ貴茂

【あらすじ】
白い日傘をさす女。彼女の使命は美しい……。

キーンコーンカーンコーン

「ねぇねぇ、《ヴァイス・シルム》って女がいるの知ってる？」
「ヴァイス？なに？」
「《ヴァイス・シルム》――《白い傘》って意味なんだけどね。これ、男の子のたちには内緒よ？」
「うん」
「噂で聞いたんだけどね――

その女を色で表現するなら白……。

そして――、

コツコツコツコツ――

夏のうだるような暑さの昼下がり、逃げ水が浮かぶアスファルトの黒に、一つだけ絵の具を落としたような白がある。
この世に厳密な白は存在しない。
白は別の色を映してしまうからだ。

ただ、そこにある白は、この世界に存在する、唯一無二の純白であるかのように歩いていた。
「北島実さん？」
「あん？」
どこの町でもみかけるような、路上でたむろする若者の集団。
その中の一人が、突如名前を呼ばれて振り返る。
「うっ！」
若者は思わず声を上げてしまった。
そこに立っていたのは、
真っ白い日傘を差し、
真っ白いワンピースを着た、
真っ白い肌をした女。
夏なのだ。そんな姿の女性などいくらでもいる。
ただ、その女に限っては、別世界から現れたかのような印象を持たずにはいられない。
顔は日傘の陰で見えなかったのだが、
「ごきげんよう」
女は傘を申し訳程度に上げると、若者に優しく微笑みかけた。
「――――――」
若者はその女の美しさに息を呑む。
若者の後ろにいた連れたちは、口笛を鳴らしたり、『上玉じゃん』などと囃し立てたりしていたが、若者は声を出すのもはばかれるほど、その女性に魅了されていた。
「少し、二人でお話をしたいのですがよろしいでしょうか？」
「あっああ」
若者が慌てたように頷くと、女は再び日傘で顔を隠して振り返り、歩き出した。
若者はそれに続く。
しばらく無言で歩いていたが、若者が痺れを切らしたように女に問いかける。

「なぁ、どっかであったことあったけ？」
「いえ、初対面です」
女は振り返らずにしっとりとした声で応じた。
「ふ～ん。で、なんの用なんだ？」
「……」
女はその問いには応えなかった。
「はい、シカトですか。ああ、しかし、みごとなまでに白って感じだな、あんた。ただでさえ肌が白いんだから、もっとオレンジとかピンクとか着たほうが似合うと思うぜ」
「……」
女は黙ってビルとビルの間の狭い道へと入っていく。
そこは道と呼ぶより、隙間っと呼んだ方がしっくりくるかもしれない。
ビルの陰になって、そこには真夏の日差しも進入を阻まれていた。
女は若者に背を向けたまま、優雅な動作で日傘を閉じる。
「なるぅ～。そういうことね」
若者はにやにやしながら言った。
そして、女に後ろから抱きついた。
「そうなら、そうと初めから言ってくれりゃあいいのによ」
女の胸を掴もうとした瞬間、

グシュ―――

「うぎゃあぁぁぁ！！」
若者は絶叫を上げる。
下半身に激痛が走ったからだ。
目を向けると、自分の腿に日傘が突き刺さっていた。
自身の血が、真っ白い日傘の布地をじわじわと侵食していく。

若者は後退するような格好で、後ろに倒れこんだ。
その拍子で日傘が腿から抜けた。
「うぐぅ――――何すんだ、てめぇ」
若者は痛みで声を震わせながら、女に血走った目を向ける。
女はゆっくりとした動作で振り返ると、男を見下ろした。
何の感情も存在しないと、自身が身に着けている白と同じような表情で。
「北島実……２０××年・８月２０日・２２：１５分、
当時女子高生だった○○○○さんを公園に強引に連れ込み暴行した罪で粛清します」
それは機械がしゃべっているかのような、抑揚のない声で告げられた。
「なんでっ！！」
その女子高生は翌日自殺し、事件は発覚することなく藪の中に葬られたはずだった。
「……」
女は答えない。その代わりに、

グシュ――――

日傘の先端が若者の、目玉を抉る。

グシュ――――グシュ――――グシュ――――

無表情で繰り出される女の猛攻。
返り血が、純白を深紅に染める。

若者がもがき苦しみながら絶命したのを確認すると、女は日傘をその遺体に添えて、その場から静に姿を消した。
それは、真夏の昼の陽炎の如く。
後に残されたのは見るも無残な男の惨殺死体、
血でできた水溜り、

そして――――

真っ赤に染まった白い日傘だけだった……」

「ええっ！！それって四丁目で起きたっ！？」
「そう、その《ヴァイス・シルム》がやったって持ちきりよ！」
「それって、サイコじゃん」
「でも、女性の味方ってもっぱらの噂よ」
「ふ～ん。でも、なんで白なんだろう。返り血が目立ちそうなのに」
「ああ、それも噂で聞いたんだけどね。どんなゲスでも血だけは美しいものだから、せめてもの慈悲なんですって」
「へぇ～」
「……」
「ん？どうかしたの？」
「あっごめん。今日、先帰っててくんない？」

「えっ？まぁいいけど……」
「ごめんね。ちょっと用事できちゃって」
「うん。じゃあね」
「ばいばい。

……ふぅ――――。
また、傘買ってこなきゃ」

黒くて汚い粛清されるべき人生たち――――その最後くらいは、白と赤で美しく……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6581e/

真夏の昼の陽炎の如く

2010年10月8日15時11分発行